

古典期プロクセニアの政治的側面

岡 澤 亮 子

はじめに

古代ギリシア世界において、諸ポリス間の外交活動を担ってきたのは、プロクセニアと呼ばれる制度である。しかしこの制度は、ポリス間の外交活動だけに限られたものではなく、制度上また職務上多様な面を兼ね備えていった。さらに、年代的にも、その時代毎の目的を持ちつつ変化を重ねていった。それゆえ、総括的プロクセニア像というものは、なかなか構成されにくい。先行研究においてもプロクセニアの全体像ではなく、その機能についての個別的研究が主流である。⁽¹⁾

そもそもこの制度は、評議会及び民会の決議を経て賦与される資格を所有する者、すなわちプロクセノスによって運用された。プロクセノスは、出自のポリスに居ながら、別のあるポリスからプロクセノスたる資格を与えられて、その資格を賦与したポリスの利益を委任されていたのである。また、そのポリスから公用・私用を問わずやって来る者たちの保護をする役目も担っていた。この制度は、

ギリシア全土においてその存在が確認されており、史料上確認できる一番古い例は、前七世紀末と推定されている。⁽²⁾その後、前五世紀半ばには、プロクセニアは全ギリシア世界に普及し、ポリス間外交において重要な役割を果たし得るようになったのである。⁽³⁾

ポリス間外交において、外交を専門とする役人は存在せず、その時々が必要に応じてプロクセノスがあらゆる職務に対応していた。

その職務は、大まかには次の四つの役割に分類することができよう。
①自分に資格を賦与したポリスの商人が、取引のため自国を訪問した際、その商人の保証人となり、財産の管理などを行う商業的役割。
②聖地であるオリュンピアやデルフォイのプロクセノスに代表される宗教的役割。
③他ポリスの使節滞在中の接待、また自ら自国の使節となったり、他ポリスの政治家と提携するなどして国政に積極的に関与する政治的役割。
④戦時においてその重要度を増す情報収集及び提供に代表される諜報的役割。
これらの職務は、必ずしも一人のプロクセノスが全て遂行したわけではなく、各々のプロクセノスが、その状況に必要な職務を果たしたのであり、さらに各々の専門

にしたがって役割の分化が進んでいったものと思われる。

前五世紀アテナイにおいては、その対外拡張政策の推進に伴い、プロクセニアは大いに発展を遂げ、アテナイの外交史上に大きな意義を有した。その時期の史料については、筆者自身すでに取り上げ、プロクセニアがアテナイの帝国化の一要因として、いかなる役割を担ったかの分析を試みている。⁴今回は、その後前四世紀に入り、一段と複雑さを増したポリス間の国際関係において、プロクセニアがその政治的役割を強化し、国政の中枢に関わるに至った状況及びその背景について検討したい。

プロクセノスは、その政治的役割において、外国使節の歓待ばかりではなく、使節が民会などに出入りできるように便宜を図ったり、和平・休戦会談の仲介として活躍するなどしてその職務を広げていった。このような職務の多様化が、ギリシアポリスの国際関係において益々その重要性をもたらし、この国際的な役割が、プロクセニアの政治的役割をさらに促進させたのである。この結果、プロクセノスの任命には、任命する側の政治的配慮も加わり、プロクセノス個人とその任命ポリスの政治的結びつきは、一層親密なものへと変化していった。プロクセニアの政治的性格の発展とともに、プロクセノスの中には、自分へのプロクセニア賦与を提案した人物、またはその人物が属するある特定の党派との絆を強める者も現れた。

プロクセニアの政治的側面については、パールマンの研究が挙げられる。彼は、ポリスの外交政策とプロクセニアの賦与とが密接に関わり合っていることを示唆することで、プロクセノスの果たした政治的役割の重要性を強調した。また、ポリスの影響力を対外的に

拡張させるために、そしてポリス間の提携を強化するために、プロクセニアはポリス間の国際関係に不可欠な要素であったことを論じている。⁵パールマンの研究は、ギリシア国際政治における外交活動としてのプロクセニア賦与の重要性を論ずるものであるが、プロクセノスと賦与ポリスとの間の、ポリスを越えた強力な結びつきを導いた、あるいは可能にさせた要因またはその背景についての考察はなされていない。

本稿では、パールマンの研究を踏まえつつ、まず、プロクセノスと党派との関係がいかなるものであり、それがプロクセニアの制度にどのような影響を与えたのか、あるいはどのような変化をもたらしたのかについての検討から始めたい。その上で、そのようなプロクセニアの政治的役割の発展を可能にした諸要因についての分析を試みるものとする。

1. プロクセノスと党派との関係

プロクセニアは、ギリシアポリスの国際関係において非常に重要な役割を担い、プロクセノスの国際的な活躍が、プロクセニアの政治的役割をさらに促進させるに至った。この結果、プロクセニア賦与は、単なる報償あるいは名譽の特権の賦与ではなく、賦与する側の政治的意図が大きく絡むものとなったのである。プロクセニアの政治的性格の発展とともに、プロクセノスの中には、自分を任命したポリス、あるいは自分へのプロクセニア賦与を提案した人物が属するある特定の党派の政治思想に共鳴し、提携をさらに強める者もできた。この両者の結びつきはいかなるものであり、それはプロ

クセニア制度、さらにはギリシアポリス間の外交にどのような影響を与えていったのであろうか。

プロクセノスと党派との関係を論ずるにあたって、まず当時の政治家、特にアテナイの政治家が、どのようにして勢力拡大を計ったかということから見ていきたい。アテナイでは、前五世紀半ばからさらに民主政が進行し、それまでの評議会主導型の民主政から民会主導型へと民主政を動かす主体の変化が生じていた。これは、名実ともに民会が国政の最高決議機関として機能するようになったことを意味するとともに、民会で多数を占めた一般市民が、次第にアテナイの政策決定に大きく関与するようになっていったということである。

その結果、アテナイの覇権を掌握しようとする政治家にとって、多数を占める一般市民の支持を得ることはもはや無視できないことになった。そこで、一般市民を支持勢力とするためには、弁論の才により直接彼らに訴えかける方法が有効とみなされたのである。⁽⁶⁾さらに、政治家が人気を博すためには、内政のみならず外交においても卓越した指導力を示さねばならなかった。従って演説において、政治家は、自分が他ポリス及び他ポリスの有力者と個人的な関係を保っていること、またその関係により自国が享受した、あるいは将来自国にもたらされることが可能な利益をアピールし、一般市民の支持を得るよう努めたのである。このために、アテナイの政治家は、自分に有利となるような外国人へのプロクセニア賦与を積極的に提案し、他ポリスの有力者との間に提携関係を築くとともに、自国での外交政策を牛耳ろうとしたのであった。⁽⁷⁾

例えば、アテナイの政治家であるデーマデースは、初めは反マケドニア派であったが、前三三八年のカイロネアアの戦いの後、フィリポス二世に説得され、アテナイとマケドニアとの間の和平交渉に従事するようになった。以後、アテナイの親マケドニア派の領袖となり、アテナイの内政及び外交問題において、自己の又は自党派の影響力を波及させるための手段として、非常に多くの決議案を提出した。その多くは、プロクセニア賦与に関するものであり、特に前三三六年から三一九年の二〇年近くに亘って、彼は民会での決議事項の提案に専心し、多くの提案を可決させている。

その中には、前三三六年マケドニアのフィリポス二世の許を訪問しているアテナイの使節に協力し、アテナイとフィリポスの仲介役を果たしたマケドニア人⁽⁸⁾に、プロクセニア及びエウエルゲシアの賦与を提案し可決させた例や、やはり同じ時期に、オリュントスの騎兵隊指揮官であるエウテュクラテースに、自国を裏切りフィリポス二世に味方した功績のために、プロクセニアを与える決議を通過させた例などが挙げられる。このような提案を通して、デーマデースは、彼自身がマケドニアの政策を正当と評価していることを表明するだけでなく、アテナイにおいて、親マケドニアの風潮が広く流布し、彼の政治方針に対する幅広い支持が得られるよう試みたのであろう。

このような政治家による利益目的のプロクセニア利用が増加し始めると、当然の結果として、プロクセニアの大量賦与が生じることになった。この傾向は、国内において寡頭派と民主派が競争状態にあるような政情が不安定なポリス、または、国外に有力な支援者を

求めたい弱小ポリスにおいて、一層顕著なものであった。元々、プロクセノスは、ある一つのポリスに一人を任命すると規定されていたわけではなく、自国に何らかの奉仕をした他ポリス人への名誉称号の要素も強かった。また、プロクセニアは、ホメロス時代以来の網の目のように張り巡らされた有力者間の私的なネットワークであるクセニアを土台として成立した制度であると考えられるため、あるポリスのプロクセノスが同時に複数存在することもあり得たわけである。

例えば、アビュドスの政治家イフィアデースが、クニドス人によってプロクセニアを賦与された時、アビュドスにはすでに、別のクニドスのプロクセノスが存在していたことを記す碑文が残されている⁽¹⁰⁾。この場合、イフィアデースは、自国において党派のリーダーであり、彼自身国内での党派争いや国内問題解決のため、クニドスのプロクセノスとなることに関心を示したのかも知れない。また、クニドス人の方でも、新たな別のアビュドス人有力政治家と結ぶことを望む理由が生じたのであろう。このプロクセニア賦与は、クニドス国内において、異なる外交方針を持つ党派間の対立の結果を反映しているとの推測も成り立ち得る。イフィアデースのように、プロクセノスの中には、自分のポリスにおいて、党派の領袖であった者の例が多数ある。アテナイの有名な人物の例を挙げれば、キモンはスパルタのプロクセノスであり、ニキアスはシュラクサイの、デモステネスはテーバイの、⁽¹⁴⁾ カリアスはスパルタの、⁽¹⁵⁾ アルキビアデスもまたスパルタのプロクセノスであったという具合である。一方、アテナイのプロクセノスとしては、コルキュラのペイティアース、⁽¹⁷⁾

タソスのエクファントス⁽¹⁸⁾などが挙げられよう。

従って、政治家は自己にとって、あるいは彼の属する党派にとって、利益をもたらすことが期待できる諸外国ポリスの政治家に対して、プロクセニアを授与して外国に自分たちの同志を形成することを積極的に行ったのである。また、政治家自身が、外国ポリスの政治家の提案により、そのポリスのプロクセノスとなることで、他ポリスのある党派との結びつきを強化することもあった。プロクセノスの自国におけるある特定の党派への接近、及び自分を任命したポリスのある特定の党派への接近は、前五世紀中葉からギリシア世界において一般化し始めたものと見られる。この傾向は時代が下ると更に進み、前四世紀半ばまでに、プロクセニアは党派と結び付けられて考えられるようになったとされる。⁽¹⁹⁾

さて、プロクセニアの政治色の強まりは、殊にプロクセノスとその任命ポリスの党派との癒着は、たびたび他の政治家たちによって非難の対象とされた。彼らは、自分の政敵が、自己の属するポリスの利益よりも、その政敵がプロクセノスを務めるポリスの利益の方を重んじている、と主張することによりプロクセノスと諸外国ポリスの結びつきの有害性を指摘した。⁽²⁰⁾

アイスキネスは、対マケドニア政策としてテーバイとの同盟を提案するデモステネスに対し、デモステネスがテーバイのプロクセノスである点をとりあげ非難の的としている。すなわち、プロクセノスとしてのデモステネスのテーバイ人への奉仕は、アテナイへの「背信行為」(poodotai)と同義であるとし、さらに加えて、テーバイ人のプロクセノスであるデモステネスは、ギリシアにおいて最

も不正な人物であるときえ述べている。⁽²¹⁾ただし、両者は公私両面において対立関係にあったので、アイスキネスの言葉をそのまま当時のプロクセノスに対する一般的な見方として捉えるのは誤りであろう。

しかし、一方のデモステネスも、同盟市戦争後の三五年、アテナイに援助を求めていたロドスの民主派を擁護する演説において、自分はロドス側についていたけれども、決して自分はロドス人に任命されたプロクセノスではないということを強調し弁論を行っている。

「もし私がロドスの民主派にとつてのみ、利益になると考えたのなら、そのようなことを決して言わなかった。なぜなら、私は彼らのプロクセノスではなく、また彼らのうちの誰も私の個人的な友人ではないのであるから。」⁽²²⁾つまり、もし彼がロドスのプロクセノスであったのなら、アテナイの利益よりロドスの、より正確にはロドスの民主派の利益を優先させたはずであるということであり、デモステネスは自分がロドスのプロクセノスではないことを強調することにより、自分の主張の正当性を認めさせようと試みているのである。

さらに、プロクセニアなどの賦与の提案者には、しばしば収賄の嫌疑がかけられ、弁論家たちの格好の標的とされた。リュシアスには、大抵の場合、プロクセニアと対で賦与された称号であるエウエルゲシアを得るために、金銭の授受があった例が述べられている⁽²³⁾、ブルタルコスには、富裕なイオニアやテッサリア人のポリスのプロクセノスになることは、私利を得るには好都合であったことがほめかされている。⁽²⁴⁾実際、プロクセニアなどの称号の賦与に絡んで、

何件かの贈収賄の事実があったことは事実かもしれないが、それがすぐさま一般的な慣例であったとするには、十分な証拠を欠いている。

パールマンは、プロクセノスが自分を任命したポリスの利益のために、自分のポリスの利益を犠牲にしているとの非難は、根拠のないものであると見る。また、プロクセニアの賦与は、あくまで様々な奉仕行動への報償として、また一層の奉仕への期待の現われとして、さらには政治家同士の対抗の現われとして、行われたものであるとの見方をとる。⁽²⁵⁾確かに、プロクセニア賦与が政治家に利用された結果、プロクセニアの提案には、政敵をおとしめるために事実無根の多くの非難や中傷が浴びせられたことであろう。しかし、その非難が事実であったとしても、金銭を払ってまでもプロクセノスになることを望む政治家の存在は、プロクセノス職が権威、名声のみならずいまだ実質的価値をも失っていないことをあらわす根拠の一端となり得るものであろう。

このようなプロクセノスに関わる不正が、一般的な事柄であったかどうかはともかく、それを未然に防ぐために機能したと思われる役人が、すでに前五世紀のアテナイには存在していた。アテナイ支配下にある諸ポリスを監督し、その行政などを調査報告するために設置された役人であるエピスコポスがそれである。エピスコポスは、前五世紀半ばのエリュトライの決議を記載する碑文において、初めて現れる職務であり、そこではエリュトライの評議会の開設にあたって、アテナイより派遣されたことが記述されている。⁽²⁶⁾ただし、その派遣は限定された期間であり、バルカーは、エピスコポスが一つ

のポリスに常駐していたわけではなく、アテナイ帝国内を巡回し、しばしばアテナイ本国へ帰還していたことを指摘している。²⁷⁾ さて、このエピスコポスは、プロクセノスと党派の接近によって、プロクセノスの職務に何らかの弊害が生じることを未然に防ぐ役割だけではなく、アテナイとプロクセノスとの仲介役も担っていたとされている。²⁸⁾

エピスコポスとプロクセノスが、密接な関係にあったことは、アリストファネスの『鳥』の中で、赴任地へ到着したばかりのエピスコポスが最初に発する質問が「プロクセノイは何処か」であったところからも推察される。エピスコポスの任地での初仕事は、そのポリスの内政・外交に関する最新の情報を、現地のプロクセノスから聞き出すことであり、さらにその情報をアテナイ本国へ伝える役目も果たしていたものと思われる。ただし、これはあくまで想像であり、この例だけからでは、両者の詳しい関係を導き出すことは困難である。

さて、プロクセニアが政治的側面を強めていく過程を見てきたわけであるが、それに伴い大量賦与、さらには裏切りや贈賄といった問題が付随するようになった。裏切りや贈賄が、全てのプロクセノスに当てはまるものではなくとも、また、プロクセノス自身に自国の利益を蔑ろにするつもりはなくとも、党派とのつながりが強まれば自国の利益より任命ポリスの利益を優先することは、当然の成り行きであったにちがいない。このような場合、プロクセノス自身に、矛盾は感じられなかったのであろうか。また、プロクセノスの自国における名誉・権威に傷をつける結果を生じさせたのではないだろ

うか。さらに、ポリスを越えたこのようなプロクセノスと党派との強い結びつきが可能であった背景には、いかなる要因が存在したのであろうか。次に、これらの問題について、考察を進めていきたい。

2. プロクセニアの起源

プロクセノスと彼を任命した党派は、本来異なるポリスに所属するわけであるが、その両者に時としてポリスを越えた強い結びつきを可能にした要因を考察する際、先ず、プロクセニアの起源について触れなければならない。

プロクセニアの起源は、従来から客人歓待の慣行であるクセニアと密接な関係があるものとされてきた。しかしクセニアは、外国人との相互歓待の友好関係とのみ定義付けられており、多岐の用途に使用されたプロクセニアの起源とするには説得力に欠けるともみられた。マレクは、通説には確証がないとし、また客人歓待はプロクセノスの職務の一つであるに過ぎなかったため、公的制度であり一国の利益を代表する立場であるプロクセノスの起源として、クセニアは考え難いと主張している。³⁰⁾

ところが、クセニアについて、単なる相互歓待関係ではなく、より強固な結びつきに基づく関係であるということが、ハーマンによって指摘された。次にそのハーマンのクセニア解釈を取り上げ、その解釈によるクセニアとプロクセニアとを比較検討し、両者の関係がどのようなものであったのかを検討してみたい。

ハーマンは、ホメロス時代以来のクセニアという社会慣行を、儀礼的友好関係 (ritualized friendship) という語で説明する。こ

の儀礼的友好関係とは、前ポリス社会に存在した異なる社会に属する二人の間に結ばれた連帯関係のことである。この関係は、両者による財と奉仕の交換という形で具体的に現された。また、血縁関係にある者同士の間に見られるような深い情愛が示されていることから、仮想の親族関係的な絆が結ばれていたことが想定される。この仮想の親族関係の存在は、両者の間に名付け親的な関係が存在したと見られることから想像される。名付け親的というのは、クセニア関係にある者同士が、相手の名前を自分の子供につける習慣のことを指す。⁽³²⁾この異なる社会の間で結ばれた関係は、前八世紀になってポリスが生まれた後も存在し続けた。ポリスという国家機構は、前社会の産物であるクセニアを解体することなく、クセニアの上に覆い被さる形で成立したといえる。

ところで、このクセニアは、社会の全階層において結ばれていたわけではなく、上層階級の人々に限られた慣行であった。クセニアは、非自由人の間に見られたこともなければ、一方あるいは双方が女である例もまれであった。従って、クセニア関係が結ばれる際、両者の間では、対等な関係が前提となっていた。たとえ、二人の間に社会的地位の差が存在したとしても、上層階級という限られた集団内の慣行であるため、その差はさほど問題とはされなかったのである。重要なのは、相手が財力や社会的影響力など求められる資質を持っているかどうかであったとされる。⁽³³⁾

クセニアはギリシア世界のみならず、その近隣諸国にも結ばれ、ポリスの外交制度が不十分であった時代に、その欠陥を補う役目を果たし、私的レヴェルでの外交関係を成立させることに貢献したも

のと思われる。すなわち、クセニアは単なる客人歓待の慣行ではなく、相手が要求するあらゆる目的のために利用され、上層階級の人々に用いられた、国境を越えた私的外交制度として捉えられるべきである。

それでは、具体的にどのようなようにして、外国人同士である両者の間で、クセニア関係は成立したのであるのか。すでに父祖の代からクセニア関係にある場合は、単に世襲していけばよいが、見知らぬ外国人がクセニア関係を成立させるためには、それなりの儀式を経なければならなかった。まず、誓約の交換や儀礼的握手によって、お互いの敵意を解消すること、すなわち敵から友人となるための儀式が行われた。また両者の力関係によっては、エウエルゲシア（恩恵）やヒケテイア（嘆願）の提供が必要とされたのである。これらの儀式には、多くの場合、神々への誓いや儀式が伴われた。次に、両者の間で、品物の交換が執り行われるのであるが、交換されるものは、槍や書簡であったり、多額の金銭であったり、あるいは土地である場合もあった。このような形式を経て、クセニア関係が成立したとされる。⁽³⁴⁾

このように、クセニアを単に従来の「客人歓待の習慣」として捉えるのではなく、あらゆる必要に対処することを目的とした「個人的紐帯」として定義するならば、マレクによるプロクセニアとクセニアは何ら関係を持たないとする説は、受け入れ難いように思われる。また、ハーマンの見解にたてば、マレクによって指摘された従来説の問題点も解決されよう。

では、このクセニアとプロクセニアの間には、実際どのような類

似点が存在するのであろうか。この点について、触れてみたい。

先ず、クセニアにおいて存在した相互の儀礼的奉仕に似た関係がプロクセニアにも見られることが挙げられる。例えば、クセニアにおける儀礼的奉仕としては、クセニア関係にある者の一方が亡くなった場合、他方は、死んだ相手がこの世に残したことを引き受け、また死者の墓碑銘を撰し、墓碑を建てて名譽を讃える義務を負ったことが挙げられる。クセノフォンは、死んだ自分のクセノスであるプロクセノス(人名)のために、自分と相手の名前を刻んだ奉納物を作り、デルフォイにあるアテナイの宝庫に奉納し、プロクセノスの墓碑を建立した。その際の費用は、もちろんクセノフォンによって賄われている。また、ケオス島出身の抒情詩人シモーニデースも、彼とクセニア関係にあったアカルナニアの占者メグステアスのために墓碑を作ったと伝えられている⁽³⁷⁾。

プロクセノスの場合も、クセノスの場合と同様に、ポリスは死亡したプロクセノスの名譽を讃える碑銘を建立している。例えばアテナイでは、自国のプロクセノスであるセリウムブリアのピュタゴラスのために、公共費用で墓碑銘を撰し、墓碑をアテナイに建て、ピュタゴラスの名譽を後世に伝えているし、プロクセニアの決議碑文については、大抵の場合、これはアテナイの負担でアクロポリスに建立されていた⁽³⁹⁾。

次なる類似は、クセニアに見られるような仮定の親族関係的な結びつきが、プロクセニアにも存在するという点についてである。擬制的な親族関係のような絆を強めるために、クセニアが世襲されたように、プロクセニアも世襲される場合があった。例えば、アテナ

イのカリアスは、スパルタでの演説において、彼の祖父は、スパルタのプロクセノスの地位を曾祖父から相続し、それを自分の子孫に受け継がせたことを述べている⁽⁴¹⁾。ポリスは、プロクセノスを世襲化させることで、両者の関係をクセノス関係のような親密なものにし、その関係を絶つことが容易には不可能となることを、目論んだのかもしれない。

また、アポロドーロスは、ペーレウスとケイローンの話の中で、二人はクセニアの関係にあり、ケイローンは、ペーレウスの子供の養父となつて保護したことを伝えている⁽⁴²⁾。プロクセノス碑文においても、この関係と類似した、両者の関係を示唆する条項が刻まれた碑文が、数多く残っている。アテナイのプロクセニア碑文の場合であれば、アテナイは、自国のプロクセノスの保護者として、プロクセノス及び彼の家族を敵対者の攻撃から保護する、という条文が記されている碑文を多く目にすることが出来る。これも先ほどの例と同じように、ポリスがプロクセノスの保護者となることで、クセノス関係のような、より親密な情愛に基づく関係をプロクセノスとの間に確立しようと試みたためであるとも考えられる。

しかしながら、アテナイのプロクセノスは、自国の反アテナイ派の標的とされる場合が多々あり、このようなプロクセノス保護条項は、必要不可欠のものであったはずである。従つて、プロクセノスとポリスの親密な関係は、クセニア関係に見られるような家族的情愛関係を表面上は結んでいるように装いながらも、実際は、むしろ双方の政治的打算に基づいた一種の庇護関係であつたと言わねばならないであろう。

また、クセニアを結ぶときの儀礼の一つである「握手」が、プロクセニア碑文の上に彫刻されたレリーフに、双方が属するポリスの守護神同士の握手という形で象徴的に描かれていることなど、その類似点は多岐に亘っている。⁽⁴⁴⁾これは偶然によるものではなく、ハーマンによれば、プロクセニアがクセニアの儀礼形式を基にして作られた制度であるからであり、プロクセニア決議碑文に刻まれた条項⁽⁴⁵⁾それ自体が、クセニアの各儀式の改訂であるからということになる。すなわち、クセニアにおける相互贈与の儀礼は、プロクセニアでは、ポリスからプロクセニアへの特権授与という形に変化し、クセニアの客人接待の習慣は、プロクセノスへの特権の一つである国費による食事への招待（クセニア）という形に移り変わったものと見るこ

とが出来るのである。

さて、プロクセニアがクセニアを基にした制度であるとして、クセニアからプロクセニアへはいかなる発展過程をたどったのか、また両者の間にはどのような関連が存在するのかという問題が残されている。この問題への可能性は、まず二つ考えられることをハーマンは指摘する。一つは、ポリスはクセニアの形式を手本としながらも、外国市民との間にそれとは全く別の正式な、非個人的な、公的結びつきである制度を確立したというもの。もう一つの可能性は、ポリスは多様化する外交関係に対応するため、また、ポリス自身の利益のため、既存のクセニアによる個人的結びつきをそのまま転用した⁽⁴⁶⁾というものである。

初めの仮説は、古代ギリシアの外交機関が、今日のそれのように全く正式な、非個人的な、公的組織であることが想定されるが、古

代ギリシアには、正式な外交官職は発展せず、また正式な外交使節も存在しなかった。必要時に使節団を組織し、任務完了後解散したのである。このことを考えると、真に公的な外交機関を、新たに創設したとする説は疑問視せざるを得ない。

従ってギリシアポリスは、外交活動が盛んになるにつれて、諸外国ポリスへの勢力伸張のため、まず相手ポリスの市民であり、クセニア関係のある人物に外交の仲介役を依頼した。そしてこの人物、すなわちクセノスをプロクセノスとし、彼とポリスとの間にクセニアによる個人間の私的関係とは別の、新たなより公共性の高い相互援助関係を成立させたと見るべきである。また、社会の諸制度が改革される場合、既存の制度を完全に切り離した全く新しい制度を創設することは、過重の負担が強いられることになるだろう。大抵の場合、既存の制度は、新しい社会や環境に適合するよう改められ、新機能が付加され、新名称がつけられて使用されたはずである。プロクセニアの場合も例外ではないであろう。既存のクセニアを、共同体対個人の関係においても、うまく利用したと見るべきであり、その際クセニアでは補いきれない新たな問題に対処するために、新たな機能が加えられて、プロクセニアという名称がつけられたと見るべきではないだろうか。ゆえに、プロクセニアは、その内部にクセニアという私的品格を包含しており、公的かつ私的目的が共存した、公的というより半公的の制度であったといえるかもしれない。

さらに、プロクセニアがクセニアを包含しているという証拠として、あるポリスに、別のポリスのプロクセノイが、複数存在していたことが挙げられよう。⁽⁴⁷⁾すなわち、この複数のプロクセニアは、複

数のクセニアの結びつきに対応した結果であり、大まかには、クセニアのネットワークとプロクセニアとは一致する。ただし、この同一ポリスの複数のプロクセノイについては、不明確な点が多く、ウォルバンクは、彼らが全員同じ義務を負ったのか、またはそのうちの一人が、筆頭プロクセノスであったのかどうかは不明であるとしている。また、ゲロリマトスは、プロクセノイは各々の専門に従い、職務を分化していたのではないかとの見解を示している。⁽⁴⁹⁾しかし、たとえプロクセノイの間に地位の差があったにせよ、または役割の分担があったにせよ、それぞれのプロクセノスは、ポリスとの間にプロクセニア関係を結んでいたという点では同等である。

以上のように、ハーマンによるクセニア解釈に従えば、プロクセニアの起源をクセニアに求めることに何ら問題はないように思われる。また、プロクセニアが、その内部にクセニアという私的制度を抱えているという指摘こそが、前節で挙げた問題点に対する一解答となるであろう。すなわち、プロクセノスが政治的側面を強め、個人的に党派と密接な関係を持つことが可能であったその背景として、プロクセニアがクセニアをその起源とし、クセニアの私的結びつきを内在させるがゆえに、公的制度でありながら私的目的にも利用されうる可能性を残していたと考えられるということである。

3. 政治的側面の発展の要因

さて前節では、プロクセニアとクセニアの関係を見てきたわけであるが、次にプロクセノスと彼が属するポリスの関係について検討を加えたい。そしてプロクセノスが、自分のポリスにおいて、他の

ポリスの政治的機関として、なぜ自国からの圧力・干渉をさほど受けずに、職務を支障なく遂行できたのかという問題について考えてみたい。

プロクセニアは、その賦与にポリスの評議会及び民会の決議が必要とされる公的な制度である。しかし一方で、プロクセノスの称号を与えられた者は、自分のポリスにおいては、他ポリスの権益を代表する者としての公的な立場を、必ずしも認められているわけではなかった。従って、プロクセノスの職務は、任命ポリス側から見れば、公的な行動であっても、プロクセノス自身のポリスにとっては、私的な行動と見なされていたことになる。⁽⁵⁰⁾

トゥキュディデスの記述によれば、前四一八年夏、スパルタ勢がアルゴスに侵攻し、両軍がまさに激突しようとした時、スパルタのプロクセノスであるアルゴス人のアルキフローンとアルゴスの将軍の一人トラシュロスは、彼らの一存で民会の承認を待たずに、スパルタのアーギス王の許へ赴き、戦いを休止するように申し入れた。アーギス王は、この申し入れを受け入れ、休戦を宣して兵を引いた。その事を知ったアルゴス人たちは、人々の同意なしに和議を結んだ者たちに対して、激しい非難を浴びせた。⁽⁵¹⁾彼らは、トラシュロスを磔刑にかけようとし、彼の財産を没収した。しかしアルキフローンは、非難されはしたものの、彼に対する処罰についてトゥキュディデスは何も述べていない。この事についてゴウシエは、ポリスの公的な役職である将軍のトラシュロスのみがその責任を問われ、プロクセノスは自国において、公的な職務とは見なされていないなかったために、アルキフローンはいかなる処罰をも受けなかったのではな

いかと見ている。⁽⁵²⁾

プロクセノスが、自分のポリスに拘束されない私的立場において、行動することが可能であったにせよ、時としてその行動は自国への背反行為を意味したはずである。自分のポリスを裏切るようなことを、プロクセノスは何の呵責も感ずることなく平気で行うことが出来たのであろうか。そもそも当時のギリシア人たちは、自分のポリスに対して愛着あるいは忠誠心のようなものを、どの程度抱いていたのであろうか。また、ギリシア人の忠誠心を導き出す正義あるいは倫理観といったものは、どのようなものであったのか。

クルーストは、アテナイ人を例に挙げ、彼らにとってポリスは、彼らが忠誠を捧げる第一のものでもなければ、唯一のものでもないことを論じている。その理由は、ポリスとその最小構成単位である家（オイコス）との間には、大小様々な地縁的、あるいは血縁・民族的社会集団が、幾重にも重なって介在しており、アテナイ人はポリスの構成員である前に、それらの社会集団の構成員であらねばならなかったためであるとして⁽⁵³⁾いる。

また、そのような集団の他にも、親戚・縁者・友人との交遊関係を基にした集団も存在し、各人は自発的動機からその集団に加わり、非常に強い絆で結ばれていた。この交遊関係に基づく集団に属する者たちは、共通した社会的関心や政治的志向を持ち、その結果、集団の指向を次第に政治的なものへと向けることになった。このような政治集団は、古典期アテナイにおいて多数並存しており、その複数の集団は、政治集団としてその時々⁽⁵⁴⁾の政治情勢に応じて離合集散を繰り返し、アテナイの国政に多大な影響を与えていたとされている。

る。⁽⁵⁴⁾

さらにこの集団は、血縁・非血縁の別なく、あらゆる人間関係における親しさ（フィリア）によって結びついており、この親しさによる結びつきは、人間関係を規定し、正義の概念とも密接に関わっていたとされる。すなわち、人間関係の親疎によって、果たすべき正義が規定されていたことである。当時のギリシア人にとって正義とは、友を利し、敵を害すものであった。このような倫理観に基づき、様々な共同体としてポリス社会が構成されていたのである⁽⁵⁵⁾。さて、それぞれの政治集団には、その集団を統率する政治家が存在し、各集団はその政治家と彼を取り巻く支援者から成り立っていた。各政治集団は強い絆で結ばれていたが、その絆は集団全員の団結心というより、むしろ集団の領袖である政治家と各々の支援者間の個人的な一対一の結びつき、つまり親しさ（フィリア）による関係であった⁽⁵⁶⁾。また、このような人間関係は、ギリシア社会に根強く存在する相互扶助の精神とも結びついており、与えられただけのものをその程度に応じて返すという原則があった⁽⁵⁷⁾。

従って、それぞれの政治集団に属する人々のポリスに対する考え方は、その集団の指導者の政治思想、あるいは政治的野心によって左右されるものであった。すなわち、政治集団への忠誠が、ポリスへの忠誠と相容れないこともあったことを意味する。そのような場合、政治集団への忠誠は、しばしばポリスへの忠誠を凌ぐものであったらしい⁽⁵⁸⁾。つまりは、自分のポリスよりも、政治集団の指導者との親しさ（フィリア）による個人的関係の方が重要視されたということになる。そもそもポリスとは、人々にとって絶対的な存在では

なく、条件的な存在であったともいえるであろう。彼らは、ポリスが彼らを保護し、彼らの利益の増大に努めてくれる限りにおいて、自分の祖国であるポリスを愛するにすぎないのである。

アルキビアデスの演説にも、そのようなポリスに対する考え方が表れている。アルキビアデスは、シチリア遠征中、密儀冒瀆及び石柱像破壊の嫌疑をかけられ召還命令が出されたのであるが、中傷に歪められた裁判に立たされることを恐れて、敵国であるスパルタに亡命した。⁽⁵⁹⁾ その亡命先のスパルタで行った演説において、「愛国心については、私は、私に対して不当な扱いをした国ではなく、私が市民として安全に居住することができる国に対して持っている」と述べており、ポリス市民としての権利が守られてこそ、ポリスを愛するという心情も生まれてくるものであるとしている。また、自分の政敵によるアテナイの支配から、あらゆる手段を講じても祖国を奪還する者こそ、真の愛国者であると主張する。

アルキビアデスが、祖国の奪回の名目で仇敵であるスパルタと結んでアテナイへの攻撃を行ったように、各々の政治集団は、対立する政治集団を追い落とし、自分たちが政治の主導権を握るためには、諸外国ポリスの干渉をも進んで受け入れたのである。クルーストは、ポリスが外国勢力の侵略行為などを被っている時、その陰には同じポリス内の対立集団の裏切りが存在することを示唆している。⁽⁶⁰⁾ アテナイにおいても、多数並存した政治集団は、ペロポネソス戦争による軍事的・財政的危機のため政情が不安定になると、それぞれの共通した政治的目的のために連合し、民主派と寡頭派という二つの党派を形成していった。トゥキュディデスによれば、民主派打倒をス

ローガンに結盟を交わした寡頭派に属する者たちは、アルキビアデスと提携し、ペルシアの援助を得て目的を達成しようと陰で画策していたとされている。⁽⁶²⁾

党派が、対立党派の成功を見るより、自国の独立を喪失することを取り計らったことは明らかである。そのような行動は、政敵によって支配されることは万難を期しても避けるべきという当時のギリシア人の考えによるものであったのであろう。つまり、民主派であれ、寡頭派であれ、自分のポリスの主導権を掌握しようとすることを妨害されたり、または掌握している主導権を脅かされるような場合には、自分たちの優勢を維持するために、いかなる手段をも講じたのである。

また、クセノフォンも、古代ギリシア人の愛国心について考察する上で、一つの興味深い例として挙げられよう。彼は祖国であるアテナイを離れてペルシア遠征に参加したり、その後はスパルタに仕え、アテナイを追放されている。そして、スパルタからスキルスに土地を与えられ、彼のスパルタへの献身に対する報奨として、スキルスにおけるスパルタのプロクセノスの称号を与えられている。⁽⁶³⁾ 彼には、祖国への忠誠とか愛国心というようなものはほとんど感じられない。また、彼の祖国に対する冷淡ともいえる無関心さは、裏切り行為より興味をそそられるものである。

この問題を論ずるに当たって、ハーマンはクセニアの存在も重視している。⁽⁶⁴⁾ クセニアは、上層市民の間にポリスを越えて結ばれたネットワークであり、その結びつきにより自分のポリスの外でも一定の地位を得るための手段となった。従って、その価値は非常に高く

置かれ、戦時において、クセニアと愛国心とが対立し、二者択一を迫られるような場合には、クセニアの方が重要視されることが多かった。⁽⁶⁵⁾ クセニアとプロクセニアの関係については、前にも述べたが、プロクセニアの任命にはクセニア関係が大きく関与していた。すなわち、クセニア関係にある者が、自分のクセノスを自国のプロクセノスに提案することは、よく見受けられたことであった。そのような場合には、クセニアもプロクセニアの行動を動機づける要因の一つとなり得たと考えられる。

このような古代ギリシア人のポリスに対する考え方を考慮するならば、プロクセニアが時として見せた祖国への裏切り行為も、特にプロクセニアのみの特徴付けられるものではないように思われる。それゆえ、時として見られたプロクセニアの自国に対する背信的な行動も、その名譽や權威をそれほど失墜させるには至らなかったのではないだろうか。

おわりに

前四世紀には、プロクセニアは政治的側面を發展させ、プロクセニアは党派との結びつきを強めた。その結果、プロクセニアは、任意のポリスのある党派から、同じ政治思想・方針を持つ別のポリスの党派に属する人物へ賦与されることになり、両者は密接な関係を持つに至った。それに伴い、外国ポリスにおける党派間の勢力の浮沈は、プロクセニア賦与ポリスの党派間の競争にも多大なる影響を及ぼすことになり、プロクセニア賦与は、ポリスの内政にも大きく関与したことを意味するものである。すなわち、古代ギリシア世界

においては、外交問題は内政問題と個人的レヴエールで密接に結びついていた。このようなギリシアポリスの国政において、外国ポリスの党派との仲介役を果たしたプロクセニアは、非常に重要な位置を占めたものと思われる。

従って、プロクセニアの政治的利用の拡大によるプロクセニアの賦与の増加は、直ちにプロクセニアの名譽・權威の失墜を意味するものではない。複雑化したギリシアポリス間の国際関係への徹底した適応の結果であるといえる。実際、プロクセニアは、その後も存続し、ヘレニズム時代にも通用していたとされ、それはローマによる支配まで続いたのである。

また、プロクセニアと賦与ポリスとの間のポリスを越えた結びつきを可能にしたのは、プロクセニアがクセニアを起源とし、クセニアによる私的役割を内在しつつ、クセニアのネットワークを基に發展を遂げた制度であるからだといえよう。プロクセニアが公的制度としての職務を担った後も、このような私的役割を温存し得たのは、当時のギリシア人が、フィリアに基づく正義の概念と結びついた倫理規範を持っていたからであると考えられる。本稿では、深くは触れられなかったが、この当時のギリシア人の倫理規範を詳しく検討することによって、プロクセニアの行動の動機づけにさらに接近できるものと思われる。

注

- (1) 主たる研究として M. B. Wallace, "Early Greek Proxenoï", *Phoenix*, 24, 1970, pp. 189-208. 初期のプロクセニアについて M. B. Walbank, *Athenian Proxemies of the Fifth Century*, B. C.,

- Toronto and Sarasota, 1978. 14' 前五世紀アテナイプロクセニア碑文の個別分析' S. Perlman, "A Note on the Political Implications of Proxenia in the Fourth Century B. C.", *The Classical Quarterly*, n. s., 8, 1958, pp. 185-191. 14' 前四世紀のプロクセノスの政治的機能について C. Marek, *Die Proxenie*, N. Y., 1984. 14' キリニア各地の初期のプロクセノスからの個別的功能分析' A. Gerolymatos, *Espionage and Treason. A Study of the Proxenia in Political and Military Intelligence Gathering in Classical Greece*, Amsterdam, 1986. 14' 政治的機能' 特に諜報的機能について。
- (2) コルキュラの人々が、西ロクリス、オイアンティアのメネクラテースのために建てた墓碑に、プロクセノスという単語が初めて現れる。(ML 4)
- (3) Wallace, *op. cit.*, p. 193.
- (4) 拙稿「古典期ギリシアのプロクセノス制度—前五世紀のアテナイを中心にして」『学習院史学』三二号、一九九三年、九九—一〇九頁。
- (5) Perlman, *op. cit.*, pp. 186-187.
- (6) W. R. Connor, *The New Politicians of Fifth Century Athens*, Princeton, 1971, p. 136.
- (7) Perlman, *op. cit.*, pp. 185-186. プロクセニアは世襲の場合もあるが、一般に政治家の提案により、評議会及び民会の決議を経て賦与された。従ってプロクセニアの賦与には、その時々ポリスの国内政治における政治家間の個人的な力関係が影響を及ぼしていた。
- (8) Tod 181.
- (9) Dem. 8, 40; 19, 341.
- (10) StG³ 187, 11.
- (11) Arist. Pol., 1306a, 28-33.
- (12) Andokides, 3, 3.
- (13) Diodoros, 13, 27.
- (14) Aischines, 2, 141-143.
- (15) Xen. *Hell.* 6, 3, 3-5.
- (16) Thouk. 5, 43, 2.
- (17) Thouk. 3, 34, 1.
- (18) Dem. 20, 59-60.
- (19) Gerolymatos, *op. cit.*, p. 97.
- (20) Perlman, *op. cit.*, p. 185.
- (21) Aischines, 2, 141-143.
- (22) Dem. 15, 15.
- (23) Lysias, 13, 72.
- (24) Plout. *Cimon*, 14, 4.
- (25) Perlman, *op. cit.*, p. 186.
- (26) ML 40.
- (27) J. M. Balcer, "The Athenian Episkopos and the Achaemenid 'King's Eye'", *American Journal of Philology*, 98, 1977, pp. 252-262.
- (28) Gerolymatos, *op. cit.*, p. 95.
- (29) Aristophanes, *Ornithes*, 1021.
- (30) Marek, *op. cit.*, p. 387.
- (31) G. Herman, *Ritualised Friendship and the Greek City*, Cambridge, 1987.
- (32) *Ibid.*, p. 19.
- (33) *Ibid.*, pp. 10ff.
- (34) *Ibid.*, pp. 1ff.
- (35) *Ibid.*, pp. 44-53.
- (36) Xen. *Anabasis*, 5, 3, 5.
- (37) Hdt. 7, 228, 4. 墓碑銘について、古来シモニデースの作とされてきたが、今日では彼の作ではなからと見解がある。

- (38) IG I³ 1154.
- (39) Walbank, *op. cit.*, pp. 7-8.
- (40) F. Gschnitzer, "Proxenos" Pauly-Wissowa-Kroll, *Realencyklopaedie der klassischen Altertumswissenschaft*, Supplement, 13, Stuttgart, 1973, pp. 629-730; Herman, *op. cit.*, pp. 133ff; Marek, *op. cit.*, p. 161.
- (41) Xen. *Hell.* 6.3.4.
- (42) Apollodoros, *Bibliothèque*, 3.13.3-6.
- (43) Ex. IG I³ 19; 27; 65; 156; 162; 164, IG II² 111.
- (44) Herman, *op. cit.*, p. 134.
- (45) *Ibid.*, p. 135.
- (46) *Ibid.*, p. 138.
- (47) *Ibid.*, p. 139.
- (48) Walbank, *op. cit.*, p. 7.
- (49) Gerolymatos, *op. cit.*, p. 3.
- (50) R. J. Hopper, *Trade and Industry in Classical Greece*, London, 1979, p. 113.
- (51) Thouk, 5.59.4-60.
- (52) P. Gauthier, *Symbola, les étrangers et la justice dans les cités grecques*, Nancy, 1972, p. 59, n. 135.
- (53) A. H. Christ, "Treason and Patriotism in Ancient Greece", *Journal of the History of Ideas*, 15, 1954, p. 280.
- (54) Connor, *op. cit.*, pp. 70f.
- (55) 栗原麻子「古典期アテナイにおけるフィリアと共同体——『何人でも欲するもの』による訴追について——『史林』七八・四、一九九五年、三七頁。この正義の概念と結びついたフィリアが、ポリス社会を根底において、どのように構成していたのか、また、現実のポリス社会で、具体的にどのように機能していたのかについての研究は、今のところほとんどなされて
- いない。
- (56) Connor, *op. cit.*, pp. 73-75.
- (57) B. S. Strauss, *Athens after the Peloponnesian War, Class, Faction and Policy 403-386 B. C.*, London, 1986, p. 20.
- (58) Christ, *op. cit.*, p. 282.
- (59) Thouk, 6.53; 61.
- (60) Thouk, 6.92.4.
- (61) Christ, *op. cit.*, p. 283.
- (62) Thouk, 8.48.
- (63) Diogenes Laertius, 2.51-52. タヤノフの「タヤノフ」出典以外のポリスに於いてプロクシノスとタヤノフは、例外的なものである。
- (64) Herman, *op. cit.*, p. 139, 本稿一章参照。
- (65) Dem. 52.29.